

# ぼくの歌姫



坂口 賢朔

「では、この誓約書のここに、署名と捺印を……」

脇目もふらず追いかけてきた夢が、今、閉ざされようとしていた。

差し込まれたボールペンを持つ右手が、震える。

二十八年間書き続けてきた『麻宮昇平』という文字が、今回ばかりは自分で書いたもののように見えなかった。

ぼくは、この場にいるはずのない彼女の姿を求めて、喫茶店のなかに視線を漂わせた。

「ゆかりさんは……」

「残念ながら…… 本日のこととお話ししたところ、どうしても外せないレッスンがあるとのことで、スケジュールが合わせられないそうです」

レッスン、スケジュール、そして、藤井と名乗るエージェント。

なんだか、彼女が急に遠い存在に思えてきた。

——彼女のためには、やっぱり、これがいちばんなんだよな。

「誓約に同意してくださり、ありがとうございました。」

震えが止まらない手で三文判を押すと、彼は深々と頭をさげた。

そして、背広の内ポケットに手を入れて、小さな紙片を取り出した。

「もし、どうしてもゆかりさんと会わなければならないようなことが発生しましたら、わたくしの方へご一報ください。しかるべき手続きを踏んだうえ、面会日時をご連絡さしあげます」

納得なんて、できそうになかった。

でも、ぼくという存在が、彼女の未来の邪魔になってしまうとしたら……

ここは、自分の心押し殺して、納得したふりをするしかないのだろう。

コクリと頷いたつもりだったが、微かなものになってしまった。

それでも、彼は満足したように微笑み、

「ほんとうはゆっくりしていきたいところなのですが、残念ながら仕事が残ってますので、これにて失礼させていただきます。ここの支払いはわたくしの方で済ませておきますので、麻宮さんは、ごゆっくり」

そう言って、彼は立ち去っていった。そのうしろ姿が、やけに遠くに感じられる。物理的だけでなく時間的にも、遠い隔たりがあるかのように。

なんだか複雑な気持ちで、真っ白なカップを持ちあげ、そして口をつけた。

冷めてしまった珈琲が、苦く感じられる。

その苦みから逃れるため、ぼくは窓の外を見た。

ポツリ、ポツリと雨が窓に当たり、ごくわずかな範囲の風景を滲ませる。

ぼくの代わりに空が泣いてくれている、そんな気がした。

新たな珈琲を注文する気にもなれず、かといって冷めた珈琲で何時間も粘る気にもなれず、ぼくは店を出て、雨のなかを歩き始めた。

まっすぐに伸びるアスファルトの道は、雨色に染まり、黒くどこまでも続いていく。両脇の街路樹の枝も重そうに首を垂れ、雨粒を滴らせていた。

落ちた無数のさくら色の花片は、たっぷり水を含んだためか、黒いアスファルトの色が透けて

見えた。

傘を差すのも面倒で、ぼくは、冷たい雨に打たれながら、とぼとぼと歩き続けた。

アパートに帰って、デスクチェアに腰を落とすと、ブブブという音がジャンバーの内側から響いてきた。

「あっ、そっか。サイレント・モードにしてたんだっけ……」

画面には、受話器が跳ねあがっているようなマークとが表示され、その下に『柳田篤志』という文字が浮かび上がっていた。

「はい」

「おっ、やっと出た。いったい何度電話したと思っているんだよ」

「ああ……、悪かった」

「まったく。でも、まっ、いっか」

篤志は、どうやら、かなり機嫌がいらしい。舌打ちしながらも、声はいつもより大きく、耳の奥が破裂するんじゃないかと思うほどだった。

「俺たちの天使が、いよいよ、ほんとうのプロになるんだろ？」

そんな篤志の言葉に、

「ああ」

ぼくは、そんな返事しか出来なかった。

——やっぱり、電話になんて出るんじゃないなかった。

「悪いな。そんな気分じゃないんだ。用が無いのなら、切るよ」

一刻も早く切りたくて、そんなことを言ってしまった。

「ちょっと待てよ。いったい…… お前、なんかあったのか？」

あまり話したくないことがようやくわかってくれたのか、少し篤志の声が落ちついた。

「いや、べつになにもないよ」

「ならいいけど、お前、声、暗いぞ」

「ああ、ちょっとな。今は、あまりおしゃべりしたい気分じゃないんだよ」

落ちついたとはいえ篤志の声は、ずしりと重く心にのしかかってくる。

ほんとうは、声ではないのかもしれない。

おそらく、会話の内容、それ自体が、まるでずぶ濡れになったフリースのように感じられているのだろう。

「おい、昇。いったい、どうしたっていうんだ。お前、あれほど、彼女を売り出すんだってはりきっていたじゃないか。彼女が、プロになるんだぜ。ガッツポーズのひとつもしたっていいんじゃないのか」

そんなこともあったかもしれないが、なんだか遠い昔のことを言われているような気がした。

——でも、もう関係ないんだ。だから、頼むよ、そっとしておいてくれ。

「彼女には、振られちゃったよ」

ぽつりと出てきた嘘は、電波に乗り、ぽとりと篤志の耳元に落ちた。

はずだった。

「おい、嘘だろ。お前がいなかったら、彼女は誕生しなかったんだぜ。それなのに……」

これ以上、耐えられそうになくて、ぼくは指先を動かし、通話を切った。

——べつに、ぼくがいなくても…… もし、彼女ひとりだったとしても…… 彼女はちゃんとプロになっていたさ。

そう。ぼくがいなければ…… なんて自己欺瞞にすぎない。

——ほんとうは……

喉の奥から、鈍い痛み込みあげてくる。

無理矢理、それを飲み込むようにして、

「彼女の夢のおこぼれを、ただ、貰っていただけなんだ……」

そう声に出してみた。

路地に落ちていたさくらの花びらよりも頼りなく、じっとりと湿ったその独り言は、霧散するわけでもなく、ただ消えていった。

ぼくの生活のほとんどは、彼女によって回っていたようだ。

あの藤井というエージェントと別れてからの三日間というもの、まったくなにもする気が湧かず、目覚めてはベッドの上で茫然と時を過ごし、うつらうつらと眠りに落ち、夢に驚いては目覚めることの繰り返しだった。

それは明るかろうが暗かろうが、自然のサイクルなど、まったく無視したものだった。

とにかく、まともな食事すら、とる気がおきないのだ。

それでも、腹は空く。

冷凍庫から食パンを取り出して、そのまま食べようとしたが、もさもさで泥を食べたほうがましだと思うほど不味く、仕方なく皿に乗せ、牛乳と砂糖をかけて、レンジで温めて、喉に流し込んで空腹をしのいだ。

しかし、冷蔵庫は無敵ではなかった。コンビニに行けば、いつでも食べ物が買えるが、家の冷蔵庫はすぐに空になってしまった。

外に出ることが、これほどの労力を必要としているなんて、今まで考えたこともなかった。

シャワーを浴びることすら、おっくうなのだ。

着替えの下着に、バスタオル、そういったものがどこにあるのか、どこに仕舞われているのか考えるだけでも疲れる。

——餓死って、辛いのかな？

楽に死ねるようなら、コンビニになんて買い出しに行かず、何もせずにいたい。

そう、真剣に考えている自分がいる。

空腹に耐えかねて、冷蔵庫を空にしているというのに、いざ出かけるとなると、その苦痛に耐えられそうになくなるのだ。

——空腹だってこれほど辛いのが、餓死って、もっともっと辛いのだろう。でも……

誰かが、ぼくに鞭打ってくれて、『シャワーを浴びろ』と命令でもしてくれれば、こんな気持ちにはならないだろう。

——でも、家には、誰もいない。

——だから、気力のすべてをふりしきって、まず、シャワーを浴びなければ……

ようやく動きだしたものの、胃がずしりと重い。なんだか、吐き気も感じられる。胃のなかにはなにも入っていないのだから、出てくるものなどありはしないのに、口より大きい固まりが出てきそうな気配だ。

透明で黒くて、固いののに形が変わって、冷たいのに火傷しそうな、そんな変な物体が頭に浮かぶ。

——あっ、これって、胃が裏返ったものか。

変に、納得。

シャワーの湯滴の温度が不快に感じられ、ピピピとスイッチを押し、43度にした。

熱いのに、まだ不十分のように思われ、もっと温度を上げようと手を伸ばしたが、

——これを押したら……

後戻りできなくなると脅迫観念にとらわれ、そのまま凝り固まった。

お湯が熱いと感じているのは、正常なのだろう。もっと熱くしたいと思っているのは、狂気かもしれない。その狂気に誘われ、そこに迷い込んでしまったら最後、その狂気から抜け出せなくなる。

——同一障害……

いったい何の同一障害だか判らないけれど、そんな言葉が浮かんでくる。

そう言えば、彼女も心の病を抱えていたな。鬱病も、何かの同一障害だろうか。そんな風に彼女を思いだしたけれど、彼女が想い描けなかった。姿形はおろか、顔すら浮かんでこない。

——そう言えば、彼女と直接会ったのなんて、数回だけだもんな。

四六時中、一緒にいたような気がするのに、実際の時間にすると数時間程度のことではなかった。それ以外は、パソコンの画面を通してネットで繋がっていただけだ。

パソコンの前を離れてしまえば、もちろん彼女との接点は無くなる。しかし、そんな時は、常に彼女のことを考えていた。

ログによって得られた彼女の情報を、少しずつ少しずつ、ぼくの理解できる形に直し、想像のなかで彼女という像を頭のなかで造りあげてきたのだ。

ゆかりは、実の母から虐待を受け続け、愛に渴望しているのに、愛されることに絶望を抱いている。

想像しようとしただけでも、叫ぼうにも叫べず泣こうにも泣けない、それをゆかりは実体験しているのだ。

——どれほど、寂しかっただろう。

——どれほど、辛かっただろう。

鬱という世界は、ゆかりにとって甘い蜜のような場なのかもしれない。

でも、鬱の世界には、希望が無い。

夢すら、無い。

仮想世界のなかの小さな嘘から始まったのかもしれないが、ゆかりがアーティストに成りたいと思うのであれば、それを応援してあげたかった。

そう、彼女は、アーティストの卵という触れ込みだったのだ。

アマチュアでもなく、プロでもない、そんな曖昧なプロフィール。

ゆかりの話では、プロとして活動はしていても、実際マネーは動いていないと言う。アーティスト名を聞いても、決まっていないと言う。

でも、会話の合間合間からは、キラキラとした明るさのようなものがあり、ゆかりがアーティストという夢のなかにいるのだな、そう感じられた。

「歌を歌っているときに、一番、楽しいの」

そう言ったゆかりは、続けて

「だって、色んな人になれるもの」

そんなことを、付け加えた。

「歌のなかの主人公に成りきって、それで聞く人の心が動かされれば、感動されれば、冥利につけるよね」

ログは瞬く間に流れ去っていったが、ぼくの時間は止まっていた。

たぶん、ゆかりの時間も止まっていたことだろう。

ぼくは、ゆかりの心に触れ、その素敵さに、感動に似たものをおぼえていた。

——たとえ、彼女が本物のアーティストでなくてもいい。

ぼくのなかでは、ゆかりは立派な一人前のアーティストだ。いや、一流のアーティストだ。

——だから、ぼくは、一人のファンなのだ。

「このサイトに、君のファンクラブを立ちあげよう。このサイトでは、ぼくは君のファン、第一号だよ」

そう、言っていた。

同時に、コマンドを打ち込み、新規クラブを作成し、その名を『コアラッコ・ファンクラブ』にした。コアラッコというのは、彼女のハンドルネームだ。

「ほんとうに作っちゃうなんて、思わなかったわ」

そう驚いていたけれど、喜んでくれたことだろう。ちょっと悪乗りして、ステータスにその名を掲げただけだったとしても、彼女はそう思ってくれたと思う。

もっとも、そんな気持ちは毛頭無く、いたって真剣にした行動だった。

鬱で苦しんでいるゆかりの心に、蜘蛛の糸を垂らしてあげたかった。それで彼女の力に少しでもなれるのなら、いくらでもしてあげたかった。

彼女が落ちてから、ぼくはサイトの中をうろつき回り、違う場所に行くたびに、そこにある掲示板にファンクラブのことを書いて回った。

ちょっと場違いな場所でも、足を伸ばして書いていく。ほんとうは、迷惑行為と言われてしまう可能性もあったけれど、その場の雰囲気に合わせてるようにして宣伝していった。

彼女の日々の活動内容だけでは物足りなく感じられ、

「ねえ、歌を聞かせてよ。オリジナルじゃなくてアレンジでもいいから、M3にしたものをメールで送ってくれないかな」

そう頼んだことがきっかけで、彼女の歌にアニメーションを付け、それを動画サイトに投稿しようということになった。

オリジナルのものを作るには、ひとつ問題があったのだけれど、それを解消してくれたのが篤志だった。

彼女が書いた詩を元に、篤志がデスクトップミュージック・ソフトで曲を付け、ぼくがアニメーションを担当した。

爽やかさと淡さを感じさせるために、色鉛筆で輪郭線のない風景のなかを、髪の長い女の子が自転車で走るアニメーションだ。サビの部分に入ると彼女はフェードアウトして、風だけが残る。曲に合わせ、風は流れ、途中で弾け、シャボン玉のように弾ける。

エンディングは、彼女の似顔絵だ。

微かに首を傾げる彼女は、淡い淡い微笑をし、ふと、瞬きをする。瞼が開いた瞬間、なぜか瞳は遠くに向けられ、次の瞬間戻ってくる。

そして、深々とおじぎで、ロール。

それを動画サイトに乗せ、サイト内で紹介しまくった。

やがて、独りっきりだったファンクラブは、会員数を三桁に届くくらいまでに増えていた。

彼女はサイトの有名人になり、やがて溢れ、今では届かぬ人となってしまった。彼女は現実の世界へと一歩を踏み出し、夢への階段を歩み始めたのだ。

しかし、ぼくは取り残されてしまった。

パソコン画面から感じられた彼女の息吹を、ぼくは感じとることができなくなっていた。

彼女の残り香を求めて、サイト内をうろつきまわり、ただため息を漏らすだけだ。

——こんなことになるんだったら、応援なんてしなければ良かった。

後悔したところで後戻りなど出来ないし、彼女の夢を現実のものとしようとしなければ、彼女との思い出すら残せずにいたことだろう。

「思い出かぁ……」

そういえば、彼女と出会うまで、ぼくは思い出らしい思い出を持ったことがなかったことに気付いた。

断片的な記憶はあるけれど、楽しいとか、苦しいとか、可笑しかったとか、そう言った感情が伴っていない。ただ、頭のなかに残った記録でしかなかった。

たぶん、それは、ぼくの心が止まっていたからだろう。

幼い頃、父親を亡くし、それを受け入れられなくて、心の時間を止めてしまった。

そうすることで、現実から逃れ続けてきたのだ。

一刻でも早く、大人になりたかった。

なにごとにも冷静に受け止め、ひとりで静かに対処していく。当時のぼくは、それが大人だと思っていた。好奇心に突き動かされるのではなく、目的をもって計画的に物事を進めていく。母を困らせないようにするためにも、それは必要なことだった。

もっとも、自分がそうなるろうと考えていたことなど、当時のぼくは気がつかなかった。

高校時代の部活の顧問が「おまえが一番大人だと思ったから、任せてみようと思った」と、学年リーダーとして抜擢してくれるまで……

その気持ちに応えようと、様々なことを考え、試行錯誤をしながら、リーダーたろうと努力したものの、挫折させられてしまった。

ぼくには、他人の気持ちを察することができなかったのだ。

冷静と鎮静とを勘違いし、心を動かさないようにして生きてきたのだから、とうぜんのことだった。

『死』、いったいそれはなんなのか、考えることもなく過ごしてきた。いや、それを知るのが怖くて、逃げていたのだろう。

そして、幼いぼくの心では、死と別れはイコールで結ばれていた。それゆえか、『別れ』すらからも逃げていた。心を凝り固め、常に自分の中に入り込んでいることで、外界との接触を極力減らしてきたのだ。

友人を作らなければ、それらを考えることは少なくなる。おそらく、そう直感していたのだろう。

仮想世界のなかで彼女と出会い、ひとつの夢を共に追ってきたことで、いつの間にかぼくの心はふたたび動きだしていた。

仮想現実という非日常空間が、警戒心を薄めてしまったのだ。

仮想世界では、別れは日常茶飯事だ。

今日出会って意気投合したかと思いきや、翌日には会うことができなかった。そんなことが普通におきている。それは、少し寂しい気持ちにさせられたが、涙など流すほどでもないし、表情すら陰せることがないような、些細な感情でしかない。

もっとも、仮想世界でのぼくは、ぼくであってぼくでないのだから、別れがどうのこうのという以前の問題なのかもしれない。

彼女と出会ったときも、そのくらいの軽い気持ちでいた。

「応援するね」と言っておきながら、そのサイトに飽きてしまえば彼女との関係も、それまでのはずだった。

でも、いつの間にか、そのサイトに足を向けるのは、彼女と会うことが理由となっていた。

もちろん、毎回毎回、彼女に出会えるわけではなかったけれど、彼女が出向いてきてくれるのを期待しながら他の人と話をするのも、それはそれで楽しかった。

実際には、突然現れた彼女に、極度に緊張するのだけれど……

でも、ネットのなかは、不思議だ。

相手の表情が見えないからだろうか、感情豊かになっている自分に驚かされることがたびたびあった。笑ったり怒ったり、落ち込んだりハイになったり……

特に彼女とのときは、それが激しかった。

どうしてそんなことを言ってしまったか、どんな背景があって、どんな風に感じてだか、今ではまったく思い出せないのに、誰にも言えない自分の秘密を言ってしまったことが一度ならずあった。

もっとも、そんな重大な秘密なんて、それほどある訳ではないから、正確には二度だったのだが、タイピングしてエンター・キーを押してしまった時には「あ、やっちゃった……」と思った。

これで、完全に嫌われてしまったと、先にたてなかった後悔に悔やんだ。

二度目は、彼女が自殺を口にした時だった。

ぼくは、その理由に激怒した。

「辛いことなんて、いくらでもあるよ。誰だって、経験していることなんだ。辛くて苦しいからって、自殺していたら、この世から誰もいなくなっちゃうよ。それに、君がいなくなっちゃったら、君の夢は行き場を失っちゃうだろ。夢をしっかりと掴み取るまで、そんなこと言っちゃいけない。ぼくだって、ぼくだって、誰にも言えない、言っちゃいけない、秘密にしている辛かった事があるんだ」

そう叫んで、その事を、彼女に打ち明けてしまった。

すぐさま、サイトから落ち、パソコンの電源を落とした。

でも、不思議なことにぼくは、言ってしまったことに対する後悔ではなく、彼女に寂しい思い

をさせてしまったと考えていた。

その時も彼女との別れを覚悟したけれど、なぜだかあまり辛くなかった。

それだからこそ今回の別れも、同程度だと軽く考えていた。

——でも……

なぜ、これほどまでに、心が痛いのだろう。

その答えが出ぬまま、仕方無く生きる日々が続いた。

あのエージェント、名前も思い出せないけれど、彼と別れてから、いったいどれだけ日時が過ぎていったのだろう。

それでも、ぼくは生きている。目的もないまま、空腹に耐えられないというだけの理由で、ぼくは生きていた。

そして……

今、ぼくの目の前に、一通の封筒がある。

通常の封筒よりも一回り大きく、ちょっと不格好な封筒だ。

手で中味を探ると、より一層不思議な気にさせられた。とにかく、シンプルな手紙ではなかった。

封筒の表にはぼくの名と住所、裏にはゆかりの名があった。

手紙という形式でありながら、中味を見る前からただの手紙のように思えない。宛名や差出人の名前を書いたのは、おそらく本人ではないだろう。

誰か？

考えられる範囲では、あの藤井とかいうエージェントくらいしか、思い浮かべられなかった。

ぼくは、スチール製のスケールを使って、思い切って封を開けてみた。

中には、二つの封筒と、一枚の便箋が入っていた。

前略

麻宮昇平様にとられましたは、まことに苦渋の誓約でありましたことでしょうか、遵守してござっております、誠に感謝しております。

本来ならば、わたくしの方から連絡申しあげるのは、ルール違反にあたるのですが、ゆかりさんたっての希望でありますので、失礼のほど、お許し下さりますよう申し上げます。

同封の二通の件ですが、

一通目は、見てもおわかりのとおり、彼女の公式ファンクラブが発足し、その会報誌となります。ゆかりさんがプロダクション側の反対を押し切り、昇平様をファンクラブ員と認めさせたことを一筆しておきます。

そして、二通目のピンク色の封筒の件ですが、こちらの内容はご推察のように、わたくしも存知あげておりません。彼女からの個人的なものをご理解いただいてよろしいかと思えます。

それでは、書中にてお礼とご挨拶を申し上げます。

草々

平成〇〇年〇月〇日

藤井 学

それを一瞥しただけで、ピンク色の方の封筒を持ちあげた。

不均一な繊維を指の腹に感じながら、裏・表を見た。宛名も差出人の名も書かれていない封筒に、メの字のような封印だけが刻まれている。

それだけでも、なんだかシックな雰囲気伝わってくる。

ただ単に、ネットの向こうの彼女を、思い浮かべているだけなのだろうか。それとも、封筒自体が、そういった感じをかもし出しているからなのだろうか。どちらかは判別できなかったものの、その封筒は彼女の風をまとっていた。

耳元で、トトトトと音が鳴る。

それは、ぼくの鼓動の音だった。

封を開けることが、ためらわれた。

なぜか、なんて考えたくもない。

だから……

ぼくは、会報誌の方を開けてみた。

そこには一枚のカードが同封されていて、表の右下に『000000001』と浮き彫りにされていた。ちょっと受け入れがたい番号だ。たぶん、なにかの冗談に違いない。

会報誌の方も見た。読むという動作ではなく、チェックするといった見方だ。

全体としてのレイアウト。写真まわりの空白の取り方。書体とおよび文字の並び。どれをとっても、悪ふざけするために作られたもののように思えなかった。

彼女は、ぼくの手を離れ、一般社会でプロとして活動しているはずだ。

——いまさら、ぼくが入り込める余地など無い…… 筈だ。

困惑したまま、ピンクの封筒の封を切っていた。

そこに、救いを求めて。

『冗談だよ』

その一言が、書かれていることを望んで。

彼女がこれほど達筆だったとは、思いもしていなかった。セピア色の万年筆の文字は、判読不能なまでには崩されてはいない。ちょうど、読めるか読めないかといった感じで綴られていた。

リッキーさん、お久しぶりです。元気にしていますか？

わたしは、ほんとなら、超元気です。って言わなければ、

みんなに叱られると思うのだけれど、ちょっぴり寂しいです。

ううん、いっぱい、いっぱい寂しいです。

そんな感じで始まった手紙は、彼女の現状が書かれながらも、ぼくとの思い出が綴られていた

。——もし、この手紙を、もっと早い段階で読んでいれば……

そう思わずにはいられなかった。

手紙は、公式ファンクラブ設立の話に進み、

感謝してるよ。

今のわたしがいるのも、リッキーさんのおかげだもの。

だから、今のわたしにできる精一杯のことするね。

会員番号一番のカードは、受け取ってもらえましたか？

一番はリッキーさん以外では、ぜったいありえないもん。

コアラッコさんも、あのときのチャットを覚えていてくれたんだ。そう思うと、涙が出そう

になってきた。それだけでも、彼女のために走り回っていたことが、報われたような気がする。

ぼくは、会報誌に同封されていたCD購入用の用紙に、必要事項を書き始めた。

エレクトロニカがどんな音楽か、ゴシック・ロックがなんなのかは、パツとしなかったが、とにかく彼女の歌が聞いてみたかった。少なくとも、あのナチュラルで透明な感じではないだろう。

エイミー・ローズ・広岡というアーティスト名も、それは物語っている。

ぼくの記憶では、彼女は純日本的な感じだった。でも、会報誌のなかの写真では、どこの国と言われても判別できそうになかった。

たぶんゴシックというジャンルが、そういった化粧をさせるのだろう。真っ赤な唇と吸い込まれそうな力強い眼差し、そして漆黒の髪。メイキングにも、お国柄がでるのだと、初めて気付かされた気がする。

彼女からの手紙を読み進めると、初ライブが決まったと書いてあった。それも合同ライブではなく、彼女の単独ライブに、嬉しさが隠しきれないようだった。

彼女に促されて、封筒のなかをもう一度見てみると、そこには二枚のチケットが同封されていた。

会場をネットでしらべると、どうやらライブ・ハウスのようだ。

しかも驚いたことに、チケットに記されていた席番号は、最前列の中央だった。

そこはリッキーさんの指定席だからね。

ずっと、ずっと わたしが活動を止めるまで、永遠に……

ライブの度にチケットを送ってくれるように、

藤井さんに頼んであるから、よろしくね。

手紙の最後に書かれていたことが飲み込めずに、何度も何度も自問自答した。

だいたいにおいて、あまりにも非現実的だ。ただ、ぼくが意味を取り間違えているのだろう。それとも、彼女がだいじな言葉を付け忘れたかだ。

今回のライブ・ハウスでの単独ライブを記念して、今後もその会場でライブを予定しているのだろう。その会場のその席が、指定席ってことなんじゃないだろうか。

ライブの度に最プレミアム席を、まさかぼくにプレゼントしてくれるなんて、考えない方がいい。

——それにしても……

ぼくは、どんな顔をして、彼女に会えばいいというのだろう。ぼくが知っているのはコアラッコさんで、エイミーなんとかという人ではない。

いや、逆に言えば、彼女が知っているのは、ぼくではなく、リッキーという架空のキャラだ。

リッキーが、リッキーとして生きていくため、ぼくは顔を出してはならないのだ。

ぼくがいなくて彼女は、その席にリッキーの姿を見ることだろう。

本物の現実なるアーティストとして活躍していこうとする彼女を支え続けるのも、ぼくなんか

ではなくリッキーなのだ。

——だから、ぼくはここにいる。その席をリッキーに譲るため、ぼくはパソコンの前の席でCDを聞くよ。

コアラッコさんが、コアラッコさんでありつづけて欲しいから……

もし、そんな特等席でエイミーさんの歌声なんて聞かされてしまったら、エイミーさんの大ファンになってしまうかもしれないから……

ぼくは、コアラッコさんのファンであり続けたいから、浮気なんてしない。

「君のCDを聞きながら、コアラッコさんのアバターを想像しよう。あの夢が、見続けられるように……」